

様式2

平成30年度 自己評価表

鳥取県立鳥取雙学校

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>聴覚障がある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、自立と社会参加に向けて豊かな心とたくましく生きる力を育てる。</p>	<p>今年度の 重点目標</p>	<p>1 確かな基礎学力の定着を図るための学習指導の充実(学力向上) 2 自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実(たくましく生きる力の育成) 3 心身の健康と豊かな自己表現力の育成(心身の育成)</p>
---------------------------	--	----------------------	---

評価項目	評価の具体項目	年 度 当 初			評 価 結 果 (10)月		
		現 状	目 標 (年度末の目指す姿)	目 標 達 成 の た め の 方 策	経 過 ・ 達 成 状 況	評 価	改 善 方 策
確かな基礎学力の定着を図るための学習指導の充実(学力向上)	(幼) ○体験的な活動ができる環境や機会を設定する。	○きこえにくさによる情報や経験の不足から、興味や関心が広がりにくい傾向にある。	○体験を通して興味を持った事象について考えたり、幼児同士で伝えあったりする。	○興味や関心を広げるように、幼児の実態を把握し個々に応じた話しかけをする。 ○話の内容の理解を促すため、具体物や絵、写真などを補助的に使う。	○各年齢に応じた言葉を使ったり話の内容を考えて伝えたりして、幼児が理解できる会話をするようにしている。 ○体験したこと以外にニュースなどの話題を年齢に合わせて取り上げ、新聞の写真やiPadの動画を見せることで理解が深まり、伝え合いが活発になっている。	C	○学校行事や学部行事に関連した話題や活動を設定し話し合い活動を深める。 ○家庭でニュースの話題を取り上げ親子で話し合う機会を持つよう働きかける。
	(小) ○基礎学力が向上するよう、学びを深める発問の工夫を取り入れた授業づくりに努める。	○実態把握や教室環境の整備により学力が定着しつつあるが、長文を読んで内容を深く読み取ったり、正しく質問に答えたりする等に課題がある。	○主発問を的確に行い、反応を予想して補助的・発展的発問を工夫する等の支援を取り入れた授業づくりをすることによって、児童が主体的に深く学ぼうとするようになる。	○的確な実態把握ができるよう、実態に合った検査を実施する。 ○つまずきの記録から支援を検討する事例研究会を行う。 ○一人一授業研究会や授業研究会での成果・課題をふまえて、発問や正しく答えるための支援を実施する。	○学びを深めるための発問の工夫・支援について事例研究会を行った。「学びを深めるとは？」についても検討することができた。日々支援について話し合っているが、記録の取り方には課題が残っている。未実施の検査・一人一授業などが未実施の部分が多い。	C	○一人一授業や実態把握のための検査を実施していく。児童の反応や変容・つまずきなどを記録するとともに、発問を検討し授業研究会につなげていきたい。
	(中) ○目標を持ち、知識や技能を身につけようとする意欲的に学習する態度の育成に努める。 ○実態把握に基づく支援方法の共通理解と考える力を育成するための支援の工夫に努める。	○基礎学力はある程度定着しているが、苦手意識のある教科や学習内容に関しては意欲が低下することがある。 また、自分の考えを根拠に基づいて説明することが難しいときがあるが、視覚的支援や体験的な活動を取り入れることにより意欲的に学習しようとしている。	○自分で目標を決めることができる。 ○知識や技能を身につけようとする意欲が強い。 ○学習や活動に取り組むことができる。 ○授業の中で、自分の考えを根拠に基づいて説明できる。	○自分で決めた目標について、視覚的に到達点がわかり、達成感を味わえるよう支援する。 ○自分の考えを根拠に基づいて説明できるような発問を行う。 ○諸検査等の共通理解や行動観察等を通して生徒の実態把握を行い、支援方法の共通理解を図る。	○毎日提出する生活ノートで頑張りを称賞したり生徒の気持ちに寄り添ったりするコメントを記載し、生徒との信頼関係構築に努めている。 ○学期末の振り返りシートを用いて目標の達成度を確認し、それを踏まえ次学期の目標設定をした。 ○各教科等で自分の考えを述べる場面を設定し、教師とやり取りしながら根拠に基づいて説明できるような指導を繰り返しているところである。 ○学部研や学部の議事録を回覧しながら生徒にかかわる教員がチームで実態把握と共通理解を図り、指導・支援にいかそうとしているところである。	C	○自分の考えを見直すことができるよう教材を工夫したり時間を確保したりする。 ○一人一授業を含めた更なる授業実践を行い、そこで得た気づきを教員間で共有していく。(これまでの実践のさらなる推進)
(高) ○個々の生徒に応じた学習指導法の改善・工夫をするとともに、自学自習の力をつけるための指導方法の工夫を図る。	○課題の提出等決められた学習についてはこなすことができるが、自主学習については自分に合った学習方法を模索している生徒が多い。日々の授業を活用しながら、指導方法を工夫し、生徒の実態に応じて主体的に学習に取り組む姿勢を培う必要がある。	○自主学習について、個々の生徒が学習時間と目標を設定し、自分に合った学習方法で継続して学習できるようになる。	○個々の生徒のつまずきや特性に応じた課題を共通理解する場面を学部会やケース会議、進路を語る会などで設定し、課題に応じた指導や支援を行う。 ○授業における小テスト、スモールステップでの基礎基本の確認、ノート点検や添削をするなど工夫して生徒の状況に応じた支援を行う。	○ケース会議や学部研究のグループ研究、学部会などで生徒のつまずきや特性について共通理解し、個々の生徒の課題に応じた指導や支援を行っているところである。 ○副教材の点検を授業中に行ったり自学自習の習慣を身に付けることができるよう指導を行ったりすることにより、生徒の課題に対する取り組み方がよくなってきている。	C	○自学自習の方法について自分に合った効果的な方法が身に付くよう、生徒の実態把握と指導方法について検討を続ける。 ○副教材の問題演習を授業中に行う時間の確保を図る。	
自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実(たくましく生きる力の育成)	(支) ○家庭と連携し乳幼児のことばの育ちを促す。 ○通級指導で難聴への理解を深め自己認識を高めるような指導や支援に努める。 ○個々のニーズに合わせた支援や情報提供に努める。 ○聴覚障がいへの理解が深まるよう啓発に努める。	○子どもへの接し方に支援に必要な親子があり、伝わりやすい話しかけについての意識を高める必要がある。 ○年齢に応じた障がい認識が育っていないため問題解決に向けた行動を起こしにくい児童生徒が多い。 ○支援会議等で本人・保護者・担任との間に考え方や意識の違いが見られ、ニーズの把握が難しい場合がある。 ○医療との学習会で情報共有をしたり、研修会の講師として福祉と教育との連携を図っている。	○子どもや保護者の気持ちに寄り添いながらかかわることのできる支援を学び実践につなげることができる。 ○場面に応じて学んだことを活かして問題解決しようとする。 ○難聴に関する研修を行い様々なニーズに対応できるようにする。 ○関係機関と連携し、県内の聴覚障がい児に関する情報交換ができる。	○担当者がかかわり方のモデルを示すとともに、視覚的な支援方法を具体的に示す。 ○通級指導の連絡帳を通じて担任や保護者と情報を共有し、児童生徒の課題に対して共通の認識を持ち、連携して支援できるようにする。 ○難聴児にかかわる関係者に対し校内研修会への参加を募ったり情報交換の場を提供したりして、難聴への理解を促す情報発信をする。 ○聴覚障がいに関するリーフレットやポスターの配布や啓発活動を行う。	○子どもの気持ちを受け止める声かけや遊びの中でのかかわり方を伝えることで、親子で笑顔でやりとりをする様子が増えてきた。 ○家庭、担任、通級担当と連絡帳を通しての連携はほぼとれているが、担任欄にコメントがない時がある。 ○情報交換会を実施し情報発信を行ったり参加校からの質問に答えたりした。教育相談などでかかわりのある学校に対しては進路にかかわる情報を伝えている。しかし、全ての学校に情報発信をしているわけではない。 ○市町村へ乳幼児教育相談のリーフレット等の配布を行い啓発をしている。	B	○親子で「楽しい」という気持ちを共有しながらかかわれる活動内容を考えていく。 ○在籍校の担任等に児童の日々の様子を尋ね、情報が共有できるようにする。 ○難聴の子どもが在籍する保・幼・小・中に対して、雙学校について情報発信を積極的に行う。 ○個人病院等への啓発を行っていく。また、通級指導についてのリーフレットを作成する。
	(幼) ○様々な人とかかわる場を設定し、かかわり方を支援する。	○一緒に遊んだり話しかけたりしたい気持ちはあるが、伝わりにくいためあきらめたり消極的になったりする傾向が強い。	○幼児が互いにかかわり合いながら楽しく活動する。	○自分の思いが相手に伝わる経験を増やすため、教師が幼児同士の仲立ちをする。 ○同年齢の集団で活動する中で集団生活のルールやきまりを身につけるように、学校間や居住地域での交流及び共同学習を実施する。	○遊びの環境設定を工夫したり教師の支援を減らしたりして、幼児同士が直接かかわりあってやり取りする場面を作っている。 ○保育園での交流活動を計画通り実施している。	B	○幼児が自然に友だちにかかわることができるような活動を工夫し環境を整える。 ○3歳児の新規の交流を進める。
	(小) ○基本的な生活習慣の定着を図り、社会参加にむけて望ましい習慣や態度を育てる。	○少しずつルールを守ろうとする姿が見られるようになってきているが、基本的な生活習慣、学校生活のきまり等については課題が残る。また、社会生活におけるルールなどは未経験であることが多い。	○基本的な生活習慣が定着し、集団活動や社会生活においてきまりやルールを自ら守ろうとすることができる。	○合同学活や特別活動等でモデルを示したりどう行動したらよいか気づけるような声かけをしたりする。 ○場面をとらえて主体的に適切な行動ができるよう声かけを行う。	○合同学活において、言葉についての学習を行った。好ましくない言動について意識する児童の姿が見られるようになった。給食の配膳方法を振り返ることで、行動に改善が見られた。しかし、廊下歩行や遊びについてのルールはまだ定着していない。	C	○場に合った言動の見本を教師が示したり、適切な行動や自ら判断して守ろうとする姿をその都度称賞したりする。
(中) ○自己肯定感を持つとともに自分の課題を自分なりの方法で克服しようとする態度の育成に努める。 ○学校生活や社会生活をよりよく過ごすためのソーシャルスキルの向上を図る。	○自分の苦手な部分や課題を自分なりの解決方法で克服することが難しいときがあり、そのままの状態になっていることがある。 ○相手や場に応じた受け答えが難しいときがある。	○自己理解が進み、自分なりの課題解決方法がわかりそれを実践しようとする。 ○相手や場に応じた受け答えができる。	○自分の良さや課題を知る学習を行う。 ○課題解決方法を教師と一緒に考え、実践する。 ○宿泊体験学習や職場見学・交流学習等の校外学習等の事前学習で社会生活に必要なマナーやルールについて知り、実践し、事後学習で振り返る場面を設定する。	○宿泊体験学習や職場見学を行い、できていることや課題などの自己理解が進みつつある。 ○特設自立活動や国語等の時間を活用し、自分の今日まで振り返りをし、作文等にまとめた。自己肯定感も高まりつつあるように思われる。	C	○特設自立活動で課題に焦点をあてたソーシャルスキルを向上させる学習を取り入れる。 ○良い受け答えができているときにはその場で称賞し、ふさわしくない受け答えの時にはその場やあとで指摘し、他にどのような対応や方法があったのか問いかけ考えさせる。必要に応じて「～したほうがより良かったよね。」等教師の考えや思いを伝える。	
(高) ○常に自立と社会参加を意識した生徒指導の徹底を図り	○多くの生徒が落ち着いて生活できている。しかしながら、卒業後を意識した行動が身についていない用事がある。	○将来の社会生活を意識し、規律(時間・言葉づかい)を守り、自ら考えながら	○生徒が課題意識をもって生活できるように、生徒の課題について全教職員が共通認識した上で、指導を徹底する	○社会生活を意識した言動の律し方については指導を継続している途上である。現場体験学習や、研修の仕方やコミュニケーション		○共通理解の場を大切にし、生徒の社会自立に向けて校内外での指導や支援を継続する	

<p>した生徒指導の取組を図り、課題対応能力やキャリアプランニング能力等を育成し、規律ある生活習慣を身につけられるようにする。</p>	<p>た行動が身に付いていない状況も考えられる。そのため、自立や社会参加に向けてさらに自ら考え行動する生活習慣の確立を目指す必要がある。</p>	<p>マラソン、自転車などがから学校生活を送る。 ○社会自立のための自己の課題を知り、主体的に解決しようとする。</p>	<p>○生徒版段階表や諸検査をもとに生徒の実態を把握し、生徒一人一人の進路を考えた授業を設定する。</p>	<p>○歌などから挨拶のしかたやコミュニケーションの取り方についての課題が見られたので今後も全職員で指導を続けたい。 ○学部研のグループ研究を通じて高1生徒の実態や課題を共通理解し合うことで指導に生かすことができている。</p>	<p>C</p>	<p>○</p>
---	--	--	---	--	----------	----------

心身の健康と豊かな自己表現力の育成 (心身の育成)	(幼) ○感じたことや考えたことを相手に伝えたり表現したりする力を育てる。	○自分の気持ちを伝えるための表現方法が未熟で教師の支援を必要とする。	○幼児がそれぞれ自分なりの方法で相手に思いを伝える。	○正しい表現方法の定着を図るため、幼児の思いを押し量り拡充模倣を促す。 ○自分の体験や気持ちを表現する場として、絵日記発表の機会を設ける。	○個々の幼児の実態に合わせて模倣を促し言葉の定着を図るとともに、意図的に他クラスと合同の話し合い活動や絵日記発表を行っている。 ○自分の思いを伝えたい気持ちや表現力が育ち、教師の仲立ちがなくても伝えあうことが増えてきた。	○定期的に他のクラスと合同の話し合い活動を行い、伝え合う体験を増やしていく。 ○絵日記を通して、親子での話し合いが深まるよう支援をする。
	(小) ○友だちとの活動を通して自分の思いや考えを伝え、相手の話を理解できる力を育てる。	○自分の考えを友だちや先生に主体的に伝えようとする場面が増えている。 ○自分の思いを周りの人に伝えようとする気持ちはあるが、言葉を正しく使って表現することが未習得である部分がある。 ○友だちの話最後まで顔を見ながら聞いて理解したり、答えたりすることはまだ難しい。	○自分の経験や考えを様子や気持ちを表す言葉を使って正しく伝えようとする。 ○相手の話を最後まで聞き、内容を理解し、自分の考えを伝えようとする。	○学習時間内では、相手の顔を最後まで見て話を聞く、はっきりと相手に自分の思いを伝える等の学習ルールを徹底する。 ○学級活動や児童会活動等の集団での時間において、友だちや先生と伝え合う学習での支援を、工夫して実施する。	○自分の経験や考えを伝える際に表現の仕方を工夫しようとする姿が見られる。しかし、言葉が間違っていたり、手話があいまいに表現されてしまうこともある。また、友達の話聞くことに課題が残る。興味がないとうつぶてしてしまうことがあり、その都度確認の声かけや姿勢を直すよう支援することが必要となる。	○「話し方」「聞き方」のルールを定期的にていねいに指導する場面を設定する。今後も正確な手話やキューサインを確認していく。
	(中) ○弁論大会・体験報告会・交流活動等を通して、自己表現力の向上を図る。	○相手の気持ちや立場を考えずに行動したり自分の思いが言葉で伝えられなかったりすることもあがるが、誰とでも話をしようとし、会話を楽しもうとしている。	○自分の考えを根拠に基づいて、自信を持って表現できる。 ○相手の立場や場に応じた表現ができるようになる。	○自分の思いを根拠に基づいて自信をもって表現できるよう帰りの会で発表する機会を設定し、指導する。 ○活動の様子を動画や写真に撮り、良かった点や課題を振り返り、改善していこうとする場面を設ける。	○帰りの会で一日を振り返り、印象に残った出来事やそのことに対する自分の感想を発表している。内容がわかりにくいときには教師が「いつ?」「誰が?」「何を?」「どのように?」などと問いかけ、相手に伝わる伝え方を意識できるような声かけをしている。 ○報告会に向けた事前学習では動画で授業の発表動画を撮り、見直すことによってできていることや課題に気づき、修正しようとしている姿が見られた。	○引き続き、根拠に基づいて自分の言葉で感想を述べるができるように丁寧に指導する場面を設定する。 ○活動の様子を動画や写真で振り返り、良かった点は称賛し、課題については今後改善していけるように指導場面を設定する。
	(高) ○現場体験学習等を通して、社会を意識した体験的学習を充実させるとともに、弁論大会や手話パフォーマンス甲子園の事前指導、帯自立活動等を活用し自己表現力を育成する。また、社会自立のために自分の心身の健康と向き合うことができるようにする。	○職場の人間関係を円滑にするためには、コミュニケーション力が必要であることは生徒に理解されつつあるが、積極的なコミュニケーションにはつながっていない。また、自立や社会参加に向けて、自ら体調管理に努めることも課題である。	○交流や現場体験学習等で相手や場に応じて、積極的かつ適切にコミュニケーションをとろうとする力が向上してきている。 ○帯自立活動をはじめ、弁論大会やステージ発表を通して、自己表現力が向上している。 ○自分らしく生きるために心身の健康に関する意識が高まってきている。	○相手や場に応じた適切なコミュニケーションが取れるように、事前に具体的な場面を想定して練習を積み、実際の場面で活かすようにする。 ○帯自立活動を活用し、状況に応じた日本語の使い方(謙譲語・尊敬語)や意味の学習を積み重ねることを通して、一人一人の日本語力を伸ばす。 ○将来の就労や一人暮らしを想定して、ストレスへの対処法や健康保持の方法などについて考える場面を設定する。	○岩美高校との交流、手話パフォーマンス甲子園、現場体験学習等を通して、コミュニケーション能力の向上や自己表現力を高める努力を続けているが、積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿までには至っていない。 ○帯自立活動等で自己紹介の仕方やコミュニケーションの取り方等の指導を行い、生徒の現場体験学習に生かすことができた。 ○現場体験学習等を通し、自己の課題について本人(家庭)、教師が共通理解することができた。	○今後も交流などを通じてコミュニケーション能力を高める場を大切にす。 ○生徒の課題を解決するために日常生活や日々の学習で何をすべきか具体的に考え、計画していく。

評価基準 A: 十分達成 (100%) B: 概ね達成 (80%) C: 変化の兆し (60%) D: まだ不十分 (40%) E: 目標・方策の見直し (30%以下)